2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**障害者就労の「能力」観の再考** **－オンライン社会科見学の実践から－**
キーワード	①障害者就労、②「能力」観、③合理的環境構築

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	ハママツ　ワカバ 濱松　若葉
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	津田塾大学　学芸学部　国際関係学科　助教
現在の所属先・職位等	津田塾大学　国際関係研究所　特任研究員
プロフィール	2 年間の社会人経験を経て津田塾大学大学院に進学し、2024 年から 2026 年 3 月まで助教としてゼミ運営等の大学業務に関わる。 現在は、一般社団法人大学女性協会ならびに日本汎太平洋東南アジア婦人協会、Learning Crisis 研究会学びの危機プロジェクト（まなキキ・プロジェクト）にて役員を務める傍ら、津田塾大学国際関係研究所特任研究員として働く場の「能力」観について研究を行っている。

1. 研究の概要

本研究は、本人が持つ就労「能力」を環境調整して支え、「できる」ことを増やし、障害者がかけがえのない存在として活躍できている障害者就労の好例における「能力」観を、社会に対して社会科見学という形で紹介することで、「障害者」ではなく人としての就労を可能にする「能力」観を示し、参加者がどのように既存の「能力」観を見直していくのか、その過程を明らかにするものである。本調査の大枠は、3 段階に分かれる。まず、好例かつ社会に対して自分たちの仕事を紹介したいと望む障害者就労団体を募集し、働く障害者がいつも通りの「能力」を発揮しながら臨める社会科見学方法をヒアリング・相談していく段階。次に、すり合わせた内容をもとに、オンライン社会科見学を実施し、障害や不登校などの学びにくさと向き合っている子どもたちや特別支援学校の学生・教師、障害者就労に関心を持つ企業等の社会人を招いて、「能力」の発揮を可能にする工夫や対話の方法などを実際に見たり、体験してもらう段階。最後に、社会科見学の影響を分析するため、参加者（協力頂いた障害者就労団体含む）に対してインタビューやアンケートを行う段階である。本研究は、これら一連の段階で実施し、「できる」ことを増やす環境調整をテーマに行った社会科見学の取り組みが、参加者に対し「能力」観をどれほど再考する時間になり、どの要素が「能力」観を転換させる鍵に繋がりうるか分析した。

2. 研究の動機、目的

本研究の着想に至った背景には、「障害者の本質的排除」ともいうべき問題がある。雇用の分野でも、障害者差別が民間企業含め禁止された今、障害者が働くことそのものを表向きに非難したり、分かりやすく差別する企業はほぼないと言っていい。しかし、働く障害者からは、本人の「能力」を育成したり、発揮を促す環境調整もなく放置するような障害者雇用に対する嘆きの声が漏れ聞こえている。「障害者」の身体・精神を考えれば、同じ仕事を任せたとして一人では「できない」だろうと、最初から教育や支援を放棄し、合理的配慮すら必要のない業

務だけを任せるという構造が日本社会に出来上がっている。これは、会社にとっても、本人にとっても、もったいないことだ。

この構造がある一方で、いわゆる、障害者就労（福祉的就労）と言われる分野の職場に目を向けてみると、高い工賃を得て地域からも必要とされている事業所は、まったく違う「能力」観のもとで仕事を行っていることが分かる。「この人は障害者だから」と構えてしまい、同じ仕事は「できない」と最初から判断する企業の働き方と、障害者が活躍し品質の高い製品を作ることで評価を得ている障害者就労団体の「能力」観には大きな違いがある。本研究は、障害者雇用に苦戦している企業が持つ「能力」観に一石を投じ、周囲のサポートを含めて「能力」と考える「能力」観の転換のきっかけとしての社会科見学を提示するものである。

3. 研究の結果

調査協力団体を募集し、調整のうえ、オンライン社会科見学を合計 4 回、開催した。

第 1 回目は、2025 年 6 月 27 日に沖縄県北中城の中城公園で開催された障害者のクラフト・ワークショップ「B 型グルメフェス」に合わせる形で実施した。会場から Zoom 中継し、社会科見学参加者からの質問に対し、障害者就労支援 B 型事業所ワーカーズホームの代表およびメンバーがリアルタイムで回答する形で進行した。参加者は、121 名であった。



図 1. 社会科見学の模様（オンライン配信を行った画像のスクリーンショット）

第 2 回目・第 3 回目は、学びにくさと向き合っている子どもたちや、特別支援学校の学生、大学生や地域の方など、多様な参加者が見込まれる津田塾大学（東京都小平市）の学園祭にて 10 月 18 日・19 日に実施した。コーヒーづくりの「能力」を支える器具を沖縄から持参頂き、ワーカーズホーム代表の横山順一氏に実演頂くワークショップを実施した。参加者は合計で 126 名であり、そのなかには、第 1 回目の社会科見学に参加していた障害のあるお子さん・学生も含まれていた。アンケートでは、割りばしを使うことで誰でも綺麗にパッケージを作ることができる工夫や、人にあわせて使いやすい器具を選ぶことで「できる」ことが増えることを学んだという語りが多くみられた。



図 2. 津田塾祭において実施したワークショップの模様（右側の緑の服を着た人物が濱松）



図 3. ワークショップ「わたしたちの『できる』を、考える。」のポスター

加えて、10 月 19 日には、第 1 回目の社会科見学で時間内の回答ができなかった内容をフォローする意図で、パネルディスカッション「まなキキ社会科見学特別編：はたらくって、なんだろう②」を開催した。参加者は、オンライン 5 名、対面 13 名であった。



図 4. パネルディスカッションのポスター


図 5.「能力」を支える環境づくりについて語るパネルディスカッションの模様

また、上記社会科見学の参加者からのリクエストを受け、リアルタイムでの社会科見学ではなく、いつでも視聴できるよう、ふりがなのある字幕を入れた動画教材を作る取り組みも実施した。それが、第 4 回目社会科見学の、三瀬ルベール牧場どんぐり村（佐賀県佐賀市）との取り組みである。12 月 7 日に研究協力者の江頭早紀氏に動画撮影を依頼し、仕事の様子や環境調整方法について撮影とインタビューを行って頂いた。その模様を動画教材として編集し、子どもたちに見てもらい、語りを分析した。

なお、動画教材については、特定非営利活動法人三重ダルク「Shima Emergence Labo」（三重県志摩市）とも連携可能性を模索し、事前準備となる調査を 12 月 20 日に実施している。

上記一連の取り組みを通して得られたアンケートやインタビューから、「できる」ようになる環境構築方法を実際の就労例をもとに紹介することが、参加者が知らず知らずのうちに形成していた、本人の身体・精神に依存する「できる」「できない」の「能力」観を転換し、周囲からの支えも含めて本人の「能力」だと考える見方を促すことに繋がっていることが示された。

4. 研究者としてのこれからの展望

障害者就労の現場の知をもとに、労働市場の「能力」観をこれからも問い続ける研究者として活躍していきたい。支援により実現した社会科見学の分析結果を論文化し、社会に学術研究として公表することが、その夢の第一歩である。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

ご支援により、学びにくさと向き合っているお子さんや生徒（小学 1 年生から高校 3 年生）が、周囲のサポートを得ながら「能力」を発揮して働く職場があることを知るきっかけを作ることができました。社会科見学の感想には、算数や国語などの学びが社会でなぜ役立つか理解できたというコメントや、周囲の人の力を借りて「できる」ことを模索することは恥ずかしいことではなく必要なことなのだと気づいたというポジティブな声が溢れていました。障害者就労の優れた現場を紹介する社会科見学の取り組みは、事前調整が必要なことも多く、人手とお金がかかるものです。ご支援により、必要な機材や協力者を金銭的な不安なく手配できたことは、とても心強いものでした。改めまして、深く御礼申し上げます。